はじめに

現在、自閉症については、本当にたくさんの本が出ています。毎月、というより毎週といっていいほど本が出版されています。これらの本には、知的障害のある自閉症の子どもの話もあれば、高機能自閉症の子どもの話もあります。思春期や成人期の自閉症の方についてもとりあげられています。さらには、私（赤木）が専門としている自閉症児の発達についての本も出されていますし、佐藤比呂二さんのように現場の先生が自分の実践について書かれた本もあります。

このような状況のなかで本を出しても、「今までの本と事例が変わっているだけで、中身はだいたい似たようなものではないか」と、読者のみなさんに思われてしまいそうです。しかし、それでも私たちは、今あらためて自閉症の本を出す意義があると考えています。

なぜなら、本書が「教育」の視点で書かれているからです。「教育」の視点とは、具体的な支援方法や支援マニュアルという意味ではありません。そのような本は、たくさんあり

ます。そうではなく、ここでいう「教育」とは、自閉症の子どもに「何のために」「何を教えるのか」といった教育目標・内容についての視点を意味します。

このことを、よく指摘される「写真や絵を使った指導」を例に考えます。この指導の背景には、「自閉症の子どもは、抽象的な事柄の理解がよくないが、目で見て理解しやすい。だから、話し言葉よりも写真や絵で提示するほうがよい」とする障害の見方があります。私も基本的にはこの主張に賛同です。しかし、問題にすべきなのは、写真や絵を使うことの是非ではありません。写真や絵を「何のために」「どのような教材のなかで」使用するかが問われるべきではないでしょうか。問題行動を表面的に消去する使い方もあれば、子どもの発達を豊かにするための使い方など、さまざまな観点があるはずですし、そこには指導技術をこえた障害観・子ども観がかかわっているはずです。しかし、意外にもこのような観点から自閉症教育を論じた本は少ないのが現状です。

そこで、教育的な視点から、自閉症の子どもの理解や支援についてあらためて考えたいと思い、本にしました。本書は以下の三つから成っています。一つは、佐藤比呂二さんによる実践記録です。自傷行為が強く見られる大吉君に対する実践です。佐藤さんの実践記録から、行動の背景にある自閉症児のねがいをとらえる視点を学んでいただければと思います。二つは、佐藤さんと私の対談です。佐藤実践の読み解きから出発して、自閉症の子

どもの理解や現在の自閉症教育の状況について、二人が自由に話をしました。三つは、赤木による理論的な論文です。自閉症に対する見方や今後の自閉症教育の方向性について、問題提起をしました。

本書を、まずは自閉症の子どもにかかわっている若い先生方に読んでいただきたいです。技術的な指導方法だけを身につけるのではなく、「自閉症の子どもをどのように理解するか」「何を大事にして教えるか」といった、大きな障害観・教育観についても考えてもらえればと思っています。もちろん、すぐに答えが出ることではありません。まどろっこしく感じるかもしれません。でも、答えが出ないことをゆっくり考えることができるのは、若い先生の特権だと思っています。技術的な指導方法を学んでいるうちに、無自覚にそこから障害観・教育観を形成してしまうのではなく、この本を読むことで、少し大きな視野から自分の実践について振り返り、同僚の先生と語り合うきっかけになれば、うれしい限りです。

続いて、自閉症教育について経験のある中堅・ベテランの先生方にも読んでもらえればと思います。「〇〇プログラムと△△的な考えを折衷して実践してきたけれど、本当にこれでいいのだろうか?」と、心のなかで迷いつつ実践をされている先生方に読んでいただき、

ご自身の実践をあらためて見直すきっかけになればうれしいです。

最後に、保護者の方にもぜひ読んでいただきたいと思っています。保護者の方にとっては、我が子の教育をどうすすめるかはたいへん切実な問題だと思います。その問いかけに、本書はすぐには答えられるものではないかもしれません。ただ、長い目で見た場合、どのような視点から子育てをすればいいのかという見通しについては、いくつかのことをいえたと思っています。五年後、一〇年後の我が子をイメージしながら読んでいただければうれしいです。

「はじめに」は、このあたりにしましょう。興味のあるところからパラパラとめくっていただいて結構です。きっと、みなさんの問題意識にひっかかるところがあるはずです。そのひっかかりが、自閉症実践の新たな引き出しをつくってくれることを願っています。

二〇〇九年四月

赤木和重